

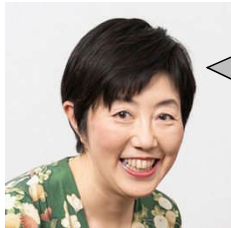


AI vs. 教科書が読めない子どもたち

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

1学期の最大の学校行事である運動会を無事に終えて、今本校では、子どもたち、教員とも落ち着いた雰囲気の中で「授業」に向き合っています。29日には、釧路教育局から指導主事を招聘して今年度の校内研究（授業づくり研究）について指導助言を受けることになっています。

さて、今回の学校だよりのテーマですが、かなりインパクトが強かったと思います。これは、2018年に国立情報学研究所社会共有知研究センター長・教授である新井紀子氏が著した書籍のタイトルです。新井氏は、2011年に「『東ロボくん』プロジェクト」（「ロボットは東京大学に入れるか」と名付けた人工知能プロジェクト）を開始します。その目的について、新井氏は次のように述べています。



AIにはどこまでのことができるようになって、どうしてもできないことは何かを解明することでした。そうすれば、AI時代が到来したときに、AIに仕事を奪われないためには人間はどのような能力をもたなければならないかが自ずと明らかになります。

このプロジェクトは、新井氏をはじめ多くの研究者が参画し精力的に進められ、2016年に大手予備校が実施した大学入試模擬試験で、東ロボくんは偏差値「57.1」を記録します。これは、全国の国公立大学のうち23大学の30学部53学科で、私立大学のうち512大学の1343学部2993学科で、合格可能性が80%という判定に当たります。私立大学の中には、首都圏や関西の難関私立大学の一部の学科も含まれています。

このように毎年、めざましい成果を出し続けていく東ロボくんでしたが、どうしても解決できなかった課題がありました。それは、「読解力を基盤とするコミュニケーション能力や理解力、柔軟な判断力や発想力」でした。つまり、これが未来社会を生き抜くために必要な資質・能力であると言ってもよいのではないのでしょうか。現代社会に生きる私たちは、読解力を基盤とするコミュニケーション能力等を十分に備えているのでしょうか。私たち以上に、未来社会の主演である子どもたちはどうでしょうか。

多くの研究者などが、「10～20年後になくなる職業」や「10～20年後まで残る職業」のリストを発表しています。「残る仕事」の共通点を探ってみると、コミュニケーション能力や理解力が求められる仕事や、柔軟な判断力が求められる仕事が多いようです。これは「『東ロボくん』プロジェクト」で明らかになったAIが不得意な分野とも合致します。

子どもたちは未来社会において、AIと共存しながら、AIにはできないけれども人間にはできる新たな仕事に就くことも考えられます。このためのキーワードが「読解力」であると新井氏は述べています。次号では、子どもたちの読解力について皆さんと考えてみたいと思います。